

Rim

PACIFIC RIM WOMEN'S STUDIES ASSOCIATION JOURNAL

「RIM」 22 号

- 巻頭詩 庭連作 しまとねりこ (Ash trees) ————— 水田宗子
- 現代「主婦」の実態とその行方—「専業主婦」の存続可能性を考察する— ————— 来住かおり
- 優秀修士論文「現代『主婦』の実態とその行方」に対するコメント ————— 矢木公子
- 【Work in Progress】文学に描かれた「近代家族」と障害者 ————— 中野恵美子
- 初期の韓国女性詩について ————— 佐川亜紀
- 四行連詩〈くちなし〉の巻 ————— 水田宗子／佐川亜紀
- 白石かずこ氏による詩の朗読とトーク—翠川敬基氏（ジャズチェロ）とのコラボレーション — 真野孝子
- 朝日社会福祉賞受賞記念国際シンポジウム：女性が語るアジアの高齢社会 ————— 北田幸恵

Vol.9 Number 2 ● November 2007

ジェンダー・女性学研究所

Josai University / Josai International University

RIM 第9巻2号（通巻22号）

目 次

巻頭詩 庭連作 しまとねりこ (Ash trees)	水田宗子	1
現代「主婦」の実態とその行方―「専業主婦」の存続可能性を考察する―	来住かおり	2
優秀論文賞受賞修士論文「現代『主婦』の実態とその行方」に対するコメント	矢木公子	14
Work in Progress 文学に描かれた「近代家族」と障害者	中野恵美子	16
初期の韓国女性詩について	佐川亜紀	33
韓国女性詩略年表		41
四行連詩〈くちなし〉の巻	水田宗子／佐川亜紀	44
【報告】白石かずこ氏による詩の朗読とトーク ―翠川敬基氏（ジャズチェロ）とのコラボレーション―	真野孝子	47
【書評】『変容するアメリカ研究のいま―文学・表象・文化をめぐる―』小林憲二編	柴崎小百合	52
【ウィメンズ・カフェ報告】ジャン・ジュヨン (Juyoung Chang) 先生による韓国のスッカラッ文化について	和智緩子	54
【ウィメンズ・カフェ報告】Sally A. Hastings 先生 A Gendered Perspective on Japanese Politics (日本における女性と政治の関わり)	門脇むつみ	58
【報告】「日韓次世代学術フォーラム第四回国際学術大会」に参加して―	松島紀子／山口理恵子／飯野由里子	62
【時事情報】「平成19年度 男女共同参画白書」	魚住明代	73
【朝日社会福祉賞受賞記念国際シンポジウム】女性が語るアジアの高齢社会	北田幸恵	74
【海外視察・調査報告】「走婚」の母系家族 - 中国雲南省の少数民族摩梭人 -	魚住明代	77
【研究所活動報告】第三回環太平洋女性学研究奨励賞授与式	遠藤恵子	84
環太平洋女性学研究会誌『RIM』バックナンバー		88
ジェンダー・女性学研究所活動記録		89
執筆者紹介		91
編集後記		92

庭連作

しまたねりこ (Ash trees)

水田 宗子

しまとねりこはいつも葉を落としている

白い花をいっぱいつけている間も

小さな芽がふき始めている時も

隣の木々が真つ赤になり

すっかり葉を落としてしまつてからも

しまとねりこは

裸のたくましい枝をはる木々の間で

青々と葉を繁らせ

いつものように一つまた一つ葉を落とし続ける

しまとねりこの葉を落とす音は聞こえない

毎日、毎時間、毎秒の営み

鑑賞されることもなく

感じ入られることもない

木枯らしが吹き始める頃

いつも山へ落葉を聞きにいった

さーと吹き降り続け

さーとどこかへ行き続ける

時の音

いつみても庭のしまとねりこは

枝葉をはり、風にそよいでいる

そして黙々と葉を落としている

朝 落ち葉を掃く

おはようと挨拶する

しまとねりこの落ち葉への

別れのことばは

いつもおはよう

まるで昨日も会つたかのように

明日も会えるかのように

しまとねりこの枝を伐るという

やめてください

自分で始末ができるんです

日々の中で

さりげない別れをくりかえし

いつも落ちてから人に告げ

わたしの日課のなかに

清めを組み入れてしまう

この庭がなくなるとき

しまとねりこもきつと灰になる

それまで一緒にいましょう

毎朝

別れの挨拶を交わしながら

修士論文要旨

現代「主婦」の実態とその行方

―「専業主婦」の存続可能性を考察する―

来住 かおり

序論

私自身の中にある「主婦」のイメージは、とくに「専業主婦」に限定した場合、決して良いものとは言えない。それは幼い頃からのマス・メディアの影響が大きいと考えられる。私がかつてマス・メディアで得た主婦像とは、「いつも家の中にいて、こまごまとした家事・育児を生きがいとし、夫に養われている存在」であった。しかしこの主婦像は、昨今のテレビドラマやその他のメディアなどからも分かるように、もはや古いイメージになりつつあると言える。果たして、マス・メディアで一般的に表現されている「主婦」が本当に現代の「主婦」像なのであるのか。現代日本の「主婦」の本当の姿・本音を浮き彫りにし、主婦が置かれている状況を再確認して「当たり前と思われている事柄を見直し」、普通は疑問に思わない事柄に、敢えて疑問を呈する」というフェミニスト的好奇心を培うことによって、女性自身のエンパワーメントにつなげていくことがこの論文の目的である。そうして、私だけではなく、すべての人の中にある旧来の「主婦」に対するイメージを刷新したいと考える。

近代以降の女性の生き方の王道であるとされてきた「主婦」という立場は、歴史の変遷とともにその位置づけが社会的な操作により揺り動かされているという現実がある。これまでの経緯から見て、現代の「主婦」はその歴史的な呪縛から解放され、新しい形の「主婦」像構築の時代に入ったといえる。このようなことから、現代の日本社会における「主婦」というものの実態・存在意義を改めて捉え直し、さらに今後はどうのような形となっていくのかも考察する。

本研究では、調査をもとに日本における有職（兼業）主婦および専業主婦の実態を明らかにしていく。まず、序論では現代主婦の誕生とその実態および他国との比較を行い、日本の主婦の特徴を示す。第1章では、過去に日本で巻き起こった「主婦論争」と呼ばれる論争の歴史と今後を考察する。第2章では、現代主婦の家事労働に対する認識として先行調査をもとに考察し、その結果が現代女性のライフコースと女性像にどう関連しているのかを専門職である看護師へのインタビューを通して浮き彫りにしていく。第3章では、新しい「主婦」の実態として、主婦のIT化と呼ばれる実態について考察する。結論では、

従来のような「専業主婦」は、今後も存続可能であるかについて論じていく。

はじめに、現代日本の主婦分析に関連する以下の三点を概説する。

1. 「主婦」という名称誕生の経緯・「主婦」(法律婚)の定義・概念

辞書で「主婦」を調べてみると、一九九〇年代では「妻であつて、家庭の仕事の中心となる人」(三省堂国語辞典)、一九八〇年代でも「一家の主人の妻で、家事をきりもりする人」(岩波国語辞典)とあり、ほとんど変化は見られない。ところが、一九九〇年代後半のものになると「家族が気持ちよく元気に仕事(勉強)が出来るように生活環境を整え、食事などの世話を中心になつてする婦人。主として妻にこの役が求められる」(新明解国語辞典)と、「主婦」妻」と限定していた時代から、明らかに変化の兆しがかえる。これは、大家族から核家族へと急速に移行したことによる家族関係の変化が影響していると考えられる。最新の広辞苑では、「①一家の主人の妻 ②一家をきりもりしている婦人。女あるじ。」と二つの解釈が出ている。「主婦」とは結婚している「妻」のことであり、また家庭を支える存在であるということが読み取れる。同時に広辞苑には「主夫」という言葉も載っており、「(従来は主婦が行うことの多かった)家事に、中心となつて従事する夫。」と出ている。これは「主婦」Ⅱ「主婦役割」Ⅱ「家事をする人」という、明確な前提の上に新たに作られた用語なのである。つまり「主婦」とは、新しい社会システムの中に適合するようにつくられたものにほかならない。

2. 現代の「主婦」の実態

次に、現代主婦の実態を、企業のアンケート調査をもとに考察する。ここではとくに仕事と働き方についての意識に焦点を当てる。

一般に女性は結婚すると、就業の有無にかかわらず、「主婦」というカテゴリーに入ると考えられている。つまり、どの女性も「主婦」と呼ばれる可能性を持っている。とくに結婚した(する)女性であれば、自分が結婚によつて「主婦」というものになった(なる)」ということを意識する機会があると思われる。それは「主婦」と呼ばれることによつて、社会のなかで自分の位置づけが変化したことを認識する瞬間なのではないだろうか。

こうした「主婦」という呼称で呼ばれることに伴つて現れる社会での位置づけの変化は、「主婦とはなにか」という根本的な問題を内包しつつ、さまざまな論争を生んできた。日本には過去に主婦をめぐる行われた「主婦論争」史がある。これについては、第1章で詳述する。

現代の女性は「仕事と家庭の両立」を理想としつつも、育児とりわけ低年齢児の育児と本格的に仕事を行うことの両立は、時間的、体力的な負担が大きく困難であるため、育児負担が最も大きい特定の時期(25〜35歳)にだけ、やむなく就業を中断することを選択し、育児に専念、それが一段落した後、自己の就業希望を実現すべく再び職業を持ち、社会の中で自己の能力を活かし、更に高めていきたいと望んでいる者が多いのではないかと考えられる。このため、子育て期間中でも就業意欲のある女性は、必然的に負担の少ないパートタイム労働者とし

て働くしかないといった現実にはさらされることになる。

企業における女性活用が叫ばれて久しいが、女性を正規の人材として重要ポストにまで登用させる企業はまだ少なく、そういった“手軽に扱えるパート女性”の存在が、会社におけるコスト削減に役立っているという側面も見逃してはならない。しかし、パートタイム労働は、子育て中の女性や夫の扶養範囲内で余裕を持って働きたい女性にとつてみれば“負担の少ない働き方”を提供してくれるものであるため、安く人材を遣いたい企業と少ない負担で働くことを求める女性双方のニーズが無くなることはなく、今後も女性労働者における高割合を維持し続けるだろう。しかし、一方でアンケートの結果のように、子どもを抱え「フルタイムで働きたいのに働けない」女性が仕方なくパートタイム労働を選択するという場合もあり、女性に対する雇用のミスマッチ感が浮き彫りになっているともいえるだろう。

3. 諸外国の「主婦」の現状及び社会的立場づけ

本論において日本の主婦を分析するにあたって、隣国である韓国および中国、カースト制度は廃止されたものの現在も社会生活上や人々の意識においてその影響が強く残るインド、“専業主婦先進国”といわれる米国、「女性の3K」という言葉の存在するドイツ、男女平等・福祉先進国である北欧3国（ノルウェー、フィンランド、スウェーデン）との検討を行う。諸外国との比較検討により、日本の主婦の特徴および共通する事柄や社会的立場づけなどを明らかにする。

諸外国と日本の主婦の状況を比較してみると、様々な相違点が見出せる。まず韓国では、専業主婦の減少や急激な少子化など極めて日本に近い現象が見られ、主婦の定義や状況も今回比較した諸外国の中でもっとも日本に近いといえる。次に中国であるが、主婦の定義こそ日本とほぼ同様であるが、その実体は大変つかみにくい。なぜなら社会主義国の中国では、国家による人口抑制策や「婦女回家」など女性政策関連の問題の影響から、女性が積極的に外に出て働くことが奨励されていないため、主婦の実情がつかみにくく、統計自体に疑問が生じるからである。このような中国の状況に近いのがインドである。インドでは現在でも宗教上の慣習・制約が女性の地位向上の足かせとなっている。このような状況では主婦の実情をつかむことは困難であり、単純に日本と比較することはできない。一方、専業主婦の歴史に大きな差があるものの、韓国と同様、専業主婦の減少など日本の主婦の状況に共通点が見られるのが米国である。また、ドイツではまだまだ女性が主婦として家庭生活に専念することに重点が置かれているように見受けられる。とはいえ、ドイツも男女共同参画社会作りに対する認識が進み、日本と同様に女性の「仕事と家庭の両立」という問題が生まれてきているということは、今後専業主婦に対する認識や状況も変化していくと考えられる。また、北欧諸国では日本に比べはるかに専業主婦は少なく、女性の労働力が高いことが分かる。しかし、女性が社会に出て働くことが当然の社会であっても、男性との賃金格差が存在するなどすべてが男女平等というわけではない。逆に専業主婦を選択した

い女性の肩身の狭さなど、有職(兼業)主婦が当然の社会ならでは問題も存在する。いずれの国においても女性がまだまだ大なり小なり社会で差別を受けていることは明らかである。

第1章 日本の「主婦論争」の歴史

「主婦」という呼称で呼ばれることに伴って現れる社会での位置づけの変化は、「主婦とはなにか」という根本的な問題を内包しつつ、さまざまな論争を生んできた。とくに日本では、女性解放論において以下に述べるような「主婦論争」と呼ばれる論争が有識者を中心に展開された経緯がある。

ここでは第一次から第三次までの主婦論争の全資料を扱い、その論争を詳細に解説・考察した上野千鶴子編『主婦論争を読むⅠ・Ⅱ』(勁草書房、一九八二年)をもとに、第一次から第三次主婦論争までを述べる。その後、一九八〇年代の論争を第四次、さらに一九九八年に起こった論争を新たに第五次と定義する(詳しくは拙論「現代の「主婦論争」を考察する——専業主婦は存続可能な存在か——城西国際大学大学院人文科学研究科『かりん かりん』第5号参照)。第五次以降を「主婦論争のその後」として、とくに若年女性に焦点を当て、現代女性の意識について考察する。

日本では一九五〇年代半ばから「主婦論争」と呼ばれる女性の生き方についての有識者から一般人までを巻き込んで二〇〇二年まで続いた。それはその時代時代を反映した論争であり、決して結論が出るこ

とはなく社会の変遷とともに様々な見解が生まれてきた。そして、それははつきりとした「論争」という形はとらなくても、現在でも人々の意識のなかに脈々と続いている問題なのである。言い換えれば、この問題とは、まさに「誰もが普段意識こそしていないが、何かの折に心の琴線に触れたとき、突如姿を現すようになる問題」と言えるのではないだろうか。

一九一〇年代から婦人雑誌として『主婦の友』や『主婦と生活』など、主婦を対象とした雑誌が出版される状況になり、女性の理想像としての「主婦」というものの存在が女性の意識のなかに根付き始めるようになった。その後敗戦を迎え、一九五〇年代に経済復興が進んでくると、戦前の女性の理想像である「主婦」を現実にしよという女性(母と娘の双方)の意識が強くなってきたところに、石垣綾子の「主婦という第二職業論」が登場し、主婦論争が勃発した。つまり、日本では近代化に伴って都市中間層(官僚や企業のホワイトカラー層)が成立したことによって、専業主婦が誕生したと見ることができ。まさにこの専業主婦とは、戦後の高度経済成長期を支える女性の重要な役割となった。そうして一九六五年に当時の文部省が「期待される人間像」(夫は仕事を、妻は家庭をという性役割分担)を発表するに至り、それが現在でも専業主婦を優遇する国策へとつながっているのである。

こうして専業主婦が誕生したことによって、性別役割分業が確立し、「主婦＝家事をする人」という明確な定義が人々のなかに認識されるようになったと考える。しかし、農耕中心の戦前型主婦の時代より、電

化製品やインスタント、レトルト、冷凍食品などの開発・普及により、家事労働量が大幅に減った。そうすると、家事は必ずしも主婦でなくともつとまるものに変化してきたと考えられる。とはいえ、いくら便利な電化製品や加工食品が普及して、家事労働量を減らすことはできたとしても、「家事」という「主婦的労働」は人間が生活していく限り、決して消滅することはない。

第2章ではこの家事労働に焦点をあて、実際の調査をもとにしたデータの分析をすすめてみたい。

第2章 調査から見る現代主婦の実像

この章では先行調査と5人の女性のインタビュー調査により、現代主婦についての実像を考察する。先行調査としては、内閣府男女共同参画局作成の『男女共同参画白書 平成17年（二〇〇五年）版』および、千葉県が城西国際大学に委託して二〇〇三年に実施した『家庭生活と就業に関する調査』を資料として使用する。

1. 『男女共同参画白書 平成17年度版』に見る現代主婦の実像

白書をもとに、家事時間の変化、家事意識の変化、働き方の変化を中心に考察する。

女性の家事時間は減少傾向にあるが、それでも昭和三五年から平成十二年までの四十年余の間、一時間でさえも短縮されていない。ということは、家電製品やインスタント・冷凍食品などの便利な消費財がいくら普及したとしても、従来の固定的性役割分担を維持した社会の

中では、女性の家事負担を大幅に軽減する結果には至っていないということになる。それは裏を返せば、それだけ便利な消費財でさえも、男性に積極的に家事を分担させるまでには至っていないということがいえる。

次に家事意識の変化であるが、白書では「女性は結婚したら自分自身のことより夫や子供など家族中心に考えて生活した方が良い」「夫は外で働き、妻は家庭を守る」という考えについて調査している。この結果、若年層ほど男女ともその考えには反対意見が多く、高齢になるにつれて従来の性別役割意識が強いことが浮き彫りになった。これには、その人々が生きてきた「女性は結婚したら家庭に入るのが当然」という、その時代の社会風潮が影響していると考ええる。とはいえ、年々その意識は高齢者でも減少してきていることが見てとれる。このように、家庭内で従来の性別役割意識が薄れてきている今、実際に家庭内で家事を担当しているのは誰なのか見てみると、共働きであったとしても、家事の担当は依然女性であることが浮き彫りとなった。意識のなかで男女平等が進んでも、実際に家事を担当しているのは従来通り女性であり、家庭の実権は主に収入を得ている男性が握っているということに変わりはないということである。言い換えれば、「収入を得る」ということは、「家事をすることよりも優先されていること」だともいえる。

最後に働き方の変化であるが、女性の場合、若年層で高学歴層であっても正規雇用ではなくパートタイム労働者が男性に比べて非常に多くなっている。自ら正規雇用を望まず低収入を受容している女性が

いるとしても、このことが家庭内での収入格差を生むのは明らかであり、それが従来の性別役割意識を無意識のうちに固定・強化させることにつながらないだろうかと危惧される。

2. 『家庭生活と就業に関する調査』に見る現代主婦の実像

千葉県における女性の就業、結婚、出産、子育てをめぐる実態及び男女の意識を個人、家庭、地域、職場のレベルから探り、そこからみえてくる男女、年齢、地域による差異の分析をとおして、就業と結婚、子育ての両立に関する環境整備について考察する。そのことから、男女が共に生きやすい社会の基盤づくりに役立てることを目的とする。

千葉県の既婚女性における家庭生活への満足度はかなり高く、「満足」あるいは「ほぼ満足」合わせて四分の三にも上ることは特筆される。しかし、職業生活への満足度は四割程度となっている。職場における男女共同参画の達成の有無、職住近接や親などのパーソナル・ネットワークの有無、充実した保育サービスの有無、そして家庭における子育てに対する男女相互の協力や理解の有無が、女性の就業状況を左右している現状は、とりもなおさず女性の就業継続にとって、そしてそれに関連する出生コントロールにとって、男女共同参画推進のための有効な手立てを提供していく必要性が高いことを意味していると考えられる。

3. インタビュー調査から見る現代主婦の実像

専門職としての仕事や家庭に対する意識を浮き彫りにするため、この章では実際に女性看護師五名にインタビューを試みた（表1参照）。五名はすべて准看護学校を経て正看護師の資格を取得している。そのた

め、通算5年間看護学校に通っていたことになり、基本的に病院に勤務しながら学んできた勤労学生である。全員が大学附属病院での勤務経験を持ち、結婚・出産などにより専業主婦も経験している。

看護師五名にインタビューをして一

番印象的だったことは、皆一様に「働く」ということに対する意欲が自然で、かつ強いということであった。離婚や夫の失業などという家庭の経済的基盤が根幹から揺さぶられるような出来事が重なっても、誰一人悲観することなく「私が働けばいい」と鷹揚に構える態度も印象的であった。

今回、先行調査として使用した千葉県の『家庭生活と就業に関する調査』の結果は、全国調査の『男女共同参画白書平成17年（二〇〇五年）版』を踏

襲するものであったといえる。地域特性から自営業主が多いものの、

自営業主の妻はその手伝いや他で就労する人が多く、正規雇用者のうち高収入層の夫を持つ妻は、専業主婦が多くなっている。この専業主婦層は夫と同様、高学歴層が多い。また、男女とも就労している世帯の学歴は高卒程度が多く、この世帯では出生率も高い。これは、女性の就労者が多いほど出生率も上がるという、北欧のデータとの共通点

	ケース1	ケース2	ケース3	ケース4	ケース5
年齢	32歳	34歳	37歳	34歳	37歳
出身	埼玉県	北海道	東京都	北海道	千葉県
居住先	東京都	北海道	千葉県	千葉県	千葉県
配偶者の職業	無し	無し	有り(31歳)	有り(35歳)	有り(38歳)
配偶者の職業	無し	無し	調理師	会社員(介護系)	看護師
家族	長男(25歳) 次男(22歳)	長男(3歳)	長女(4歳) 次女(2歳)	長女(4歳) 長男(2歳)	長男(1歳)
看護師と志した動機	夫が他界したのち 友人に勧められて	長男を目指すも 親戚に勧められて	看護師が いて身が立つ	親戚に看護師が いて身が立つ	母親が看護師の ため息に
看護学校	3期	2期	2期	2期	4期
現在の仕事	看護学校の教員 (常勤)	2交代制の病院 (常勤)	訪問看護 (常勤)	老人病院の看護 (非常勤・週1日)	眼科医院の手術室 (非常勤・週3〜4日)
結婚後の勤務	3年	1年未満	1年	1年	1年未満
収入	やや満足	やや不満	やや満足	やや満足	やや不満

表 1. 女性看護師の属性

が見出せる。さらに、男女とも就労者世帯では三・四世代同居など世帯構成員数が多い。世帯構成員が多ければ、子どもの面倒もどちらかの親が見てくれることになり、子どもの預け先を心配して働けないということとはなくなる。

これらの結果は、看護師のインタビュー調査とも共通点が見出せる。とくに、子どもの預け先を苦勞して確保しながら働く姿は共通している。しかし看護師の場合は、世帯年収に関係なく就労意欲があり、高収入層であつても専業主婦でいようとする女性はいらなかった。ここに専門職女性と一般職女性との職業に対する意識の差があるように思われた。とくに看護師は資格職として、職場も十分確保されており、転職も比較的容易である。しかし、一般企業となると結婚や出産などで一度退職してしまうと、同じような待遇の企業に勤めるのは難しいため、再就職先が限られてしまう結果となる。このような再就職先の有無および職場環境の差が、女性の就労意欲の差につながるのではないだろうか。

さらに、看護師は資格職であり、そのための学校に通って厳しいトレーニングを受けることで看護職に対する自覚を養つていくため、一度結婚や出産などで職場を離れたとしても「せっかく苦勞して取つた資格があるのだから」と考え、働こうと考えることが多いのではないだろうか。また、新卒の看護師は、大学病院や公立病院など規模の大きい病院で三交代制や二交代制の勤務をするのが一般的ため、日勤よりもさらに負担の重い夜勤を経験することで、仕事に対する強い責任感と

自覚が生まれ、そのことが一般の職種より就業意欲を強化するのではないかと考えられる。

一般職の女性と専門職の女性では、就業意欲やその実態に差が見られたが、同じ女性として社会環境を見てみると、そこには変化は見られない。子育てに孤立して悩んだり、就業継続が難しくなるのは女性だけに起こっている問題である。充実した保育サービスの整備や就業継続しやすい職場環境の整備など、まだまだ政策的に足りない部分も多い。家庭生活のなかで男女が協力して家事と子育てを分担するのはもちろんのこと、男女共同参画社会を推進するための社会整備が一層望まれる。

第3章 新しい「主婦」の実態 —主婦のIT化—

前章までは一般的な女性と専門職の女性についてみてきたが、この章ではIT化によつて急増している自宅において高収入を得る主婦の実態について考察してみたい。

従来の「主婦」は無収入であることが自明のことであつた。それは、例えば国勢調査などで「働いている」というカテゴリーに主婦は入つておらず、主婦が得た賃金収入は書き込めないようになっていたことを見ても明らかである。

このように、従来は無収入であるということがひとつの条件のように認識されていた主婦であるが、現在その実態は大きく変化しつつある様相を呈している。

1. 「主婦のIT化」の実態

「主婦のIT化」とは、従来は機械に疎いと言われていた主婦たちが、独自にパソコンや携帯電話を使ってインターネットを駆使し、検索にとどまらず通信販売物品の購入やオークション売買、さらには株式投資などで収入を得るなど、生活に欠かせないツールとしてインターネットに精通している状態を指す。財団法人インターネット協会による二〇〇五年六月二十八日付統計では、日本のインターネット人口は七〇〇七万二千人に上るといわれる。今やその平均四〇%が女性ユーザーである。パソコンを駆使して自分のホームページやブログを立ち上げ、そこで主婦の目線から情報を発信することで同じ主婦たちからの反響を呼び、それが収入につながっているという実態がある。

2. 自宅で収入を得る「専業主婦」

従来の「疲れて」「ぬか味噌くさい」などマイナスイメージで表現されることが多かった専業主婦から、自宅で自ら収入を得て、余裕を持った生活を実践している新しいタイプの「専業主婦」の存在が注目される。なかでも、「アフィリエイト」と呼ばれる企業広告のネットへの掲載によつてお金を稼ぐ「主婦アフィリエイト」、主婦のインターネットによる株取引、お花や料理など自分の趣味を生かした教室を自宅で開いて生徒に教えることで収入を得る「サロネーズ主婦」について詳述する。このような自宅などで収入を得る主婦たちの存在は、第一章の「第五次主婦論争」で述べた石原里紗への反論に十分なり得る。なぜなら、はじめのうちはお小遣い程度の稼ぎだったとしても、夫の給料のみで生活

するのではなく、あくまで自分でも稼ごうという意思を持つことに意味があるからだ。これではもはや「業主婦は夫に寄生するカチク(家畜)以下の存在」などと軽々しく呼ぶことはできないだろう。

動機こそ様々であるが社会と関わりを持ち、何らかの形で収入を得たいと考えている主婦が増えてきているといえる。しかし、自分に合った働き方や受け皿としての職場が見つからないなどの理由で、仕方なく専業主婦のまま甘んじている女性も多いと考えられる。しかし、そのような女性でもなんとか在宅でも収入を得たいと考え、オークションやアフィリエイト、インターネット株取引などを始めているのではないかと推察される。

便利な家電製品が普及し、家事も家事サービスなどでお金を払って外注することができるようになるなど、主婦が長時間家事に縛られている時代は変わりつつあるといえるだろう。さらに、インターネットを利用して収入を得ることができるようになるなど、「主婦のIT化」が急速に進むことによつて、かつての「主婦像」は崩壊しつつあると考えられる。それは従来の夫の収入に依存し、主に家事を担当しているという(専業)主婦の定義そのものの変容をも迫るものになるのではないだろうか。

結論 今後「専業主婦」は存続可能か

最終章では、日本社会において今後も「専業主婦」は存続可能な存在であり続けるか、その可能性について考察する。

1. 女性の生き方(ライフサイクル)の多様化

図1は女性のライフサイクルモデルを一九七五年と二〇〇二年とで比較したものである。これを見ると、まず学校の卒業が高卒から大卒へと移行し、ここで四年の開きが生まれる。その後は、最初の四年の開きがそのままスライドする形をとつたまま、結婚、出産、末子大学卒業と推移し、夫の退職まで続く。特筆すべきは夫の退職後である。夫の死亡年齢が71歳から77・2歳に上昇し、本人死亡は76歳から85・7歳へと十歳近くも延長している。これは、定年退職後のいわゆる「第二の人生」が十年延長していることを意味している。夫の死亡年齢が上昇したということは、それだけ夫と過ごす時間も多くなるということであり、ここには夫の介護なども含まれると考えられる。さらに、夫死亡後の本人の余生が十年延長することにより、それまでにはなかった問題などが生まれる可能性がある。具体的に、一番大きいのは経済的な問題、そして病気や怪我などの心配、さらには、十年の余生をどう生きるかといった精神的な問題などである。とくに、八十歳代後半以降は、誰もが医療費が莫大になるといわれており、そのための貯えがどうしても必要となってくる。

従来の「主婦」の様相は確実に変化しつつある。なぜなら、「主婦は無収入である」という前提が、「主婦のIT化」によって崩壊しつつあるからである。とはいえ、それはまだ「家の中で稼ぐ」という状態であり、依然家庭の中にいる状態に変わりはないとも言える。しかし、働き方にSOHO³⁾などのような新しい形が普及してき

ているように、「主婦の細分化」が進んでいるのは事実といえるだろう。

それは、インターネットを利用し自宅に居ながらにしてお金を稼いだり、自宅やその他の場所において教室を主宰するなど、雇用者としてではない新しい主婦の働き方が目立ってきていることから明らかである。このように、雇用されてはいないが自らが主体性を持って収入を得ている主婦は家に居るとはいっても、それはもはや従来の「専業主婦」とはかけ離れた存在であるといえるだろう。

2. 「主婦」の社会的地位に関する考察

近年、日本では人々の結婚観、夫婦・親子観などさまざまな価値観が変化してきているといわれている。とくに変化が著しいのが、結婚観である。日本では晩婚化が進んだだけでなく、離婚もマイナス要因とは見られなくなった。つまり、以前のように、女性の誰もが主婦になれる時代ではなくなつたともいえるのである。それは裏を返せば、誰もが主婦から主婦ではなくなる可能性を持つことも意味する。このような状況において、現代の主婦は極めて不安定な存在といっても過言ではない。

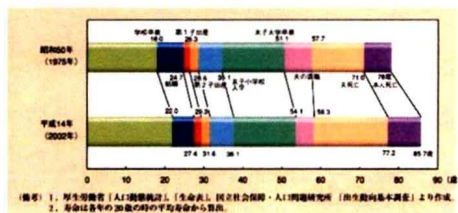


図1. 女性のライフサイクルモデルの比較

[出所] 内閣府男女共同参画局

<http://www.gender.go.jp/index.html> 2006/07/25

従来の家父長制社会では、日常生活の意思決定は男性の役割であった。しかしそれが現代では「主婦」という名のもとに、女性が日常生活全般のコーディネート、マネージメント役として存在している。とは言いながらも、重要な意思決定は男である夫が行うなど家庭内の全体的実権は夫が握っていることに変わりはない

なぜこのように妻の立場が不安定なのかを考えた場合、その理由として一番に考えられるのが「経済力のなさ」だろう。離婚の際、経済力がないばかりに自分が産んだ子どもさえ夫に奪われるのが女性の現実である。その女性が経済力を持つことによって、主婦の特権である「時間的資源（時間的余裕）」、「自由裁量」が大きくなり、それがさらに「活動範囲の拡大」につながっていく。主婦は従来家の中だけの存在であり、活動しないことが前提であったが、こうして活動範囲が広がることで、さまざまな情報を得られるようになる。それは働き方の変化にも影響する。雇用者としてではなく、在宅ワークを始める場合がそうである。

また、流通業界の形態の変容が主婦におよぼす影響も無視できない。主婦が経済力をもつことで、市場は一層活性化する。主婦の購買動向を分析して商品開発を進めるなど、マーケティングは主婦層市場をものはや無視することはできない。

3. 「専業主婦」でいられる条件

結婚した女性が専業主婦でいられるためには、それを養うだけの夫の収入があることが必要不可欠である。そのためには必然的に夫がそ

れなりの会社、もしくは社会的地位にいたる必要があるため、専業主婦志望の女性たちはそうした高収入を期待できる男性を求める。こうして収入という基準で夫を見つけた女性は、自分以外の夫婦・家族を収入状況で見るようになり、このことで家族単位の優劣を推し量ることが女性の階層意識につながっていくのではないかと考える。

女性だけでなく、男性も妻を「専業主婦」でいさせられることに、ある種の優越感をもつことも知られている。しかしそれは、夫が自身の社会的地位に照らし合わせて「専業主婦」を捉えた結果であり、いうなれば「専業主婦」の存在を自分の付加価値と位置づけているところに問題があるといえる。しかし、男女ともそうした収入基準によって「専業主婦」を高収入家庭のステータス・シンボルのように捉えること自体が、女性だけでなく社会の階層化、すなわち現在の格差社会を作り出している一因となっているのではないだろうか。

4. 専業主婦は存続可能か

女性の平均寿命が伸び、主婦も無業の専業主婦から、家庭をベースにしつつ自宅で収入を得られる主婦、パート主婦、正規雇用の主婦など生き方・働き方も多様化していくなかで、今後ますます世帯収入により階層化が進んでいくと考えられる。女性の階層化は夫の収入だけでなく、自身の学歴も影響する。なぜなら、ある程度知識があれば、専業主婦であっても自宅でサロンを開業したり、インターネットを駆使して収入を得ることは難しいと思われるからである。ITの知識があれば、安易に雇用者になろうとはせず、自分

で起業してみようと考えた専業主婦がいても不思議ではない。つまり、主婦も賢くお金を稼げる時代になったといえるのである。しかし、そういった知識や能力が十分にはないと思えば、専業主婦のままとどまるしかない。つまり、女性の階層化には、夫の収入のほか、女性自身の高学歴化とIT技術の広がりも密接な関係を持っているのである。

夫に依存した存在という妻のあり方だけではなく、新しい形として最新のテクノロジーと高度な知識を消化・応用できる主婦のみが収入を得ながら在宅主婦として存続可能だろう。こうして自身の裁量で収入活動を伴う社会活動は生きがいにもつながり、それが女性の精神的・経済的自立にもつながっていくと考えられる。とはいえ、それなりの収入を得るようになれば、税金の問題なども出現してくる。今後は専業主婦だった女性が在宅ワークをするだけでなく、企業などで専門的にITを扱っていた女性なども自宅で活動していく可能性が考えられる。

いわゆるサラリーマンの妻と呼ばれる近代主婦は、今後解体・消滅していくだろう。近代主婦は中間層と呼ばれる主婦たちであった。その中間層が減少し、格差が生じて二極分化しつつあるのが現代日本社会である。家事・育児が生活の中心で夫の収入のみに頼り、高度経済成長を牽引してきた夫を支え続けた従来の妻の姿は消滅し、今後は、一部の限られた高階層の「専業主婦」、自宅で収入を得る主婦（もはや専業主婦とは呼べない）の登場、従来の兼業主婦（フリー

ター主婦、パート主婦、仕事を中心に考えるキャリアウーマン主婦など）と、その姿はますます多様化した姿になっていくだろう。なかでもとくに「自宅で収入を得る主婦」は、安定収入はないが、主婦最大のメリットである自由度と時間的余裕を使って、自分のペースに合わせて仕事ができることで、新しい形として今後ますます広まっていくだろう。しかし、こうした働き方の多様化は、職業との関連でいくつかの収入層をなし、夫を考慮せずに純粹に女性の格差を生む結果にもつながるだろう。そのように考えると、働き方の多様化は、格差社会を助長させるある種の危険性を孕んでいるとも考えられるのではないだろうか。

5. 総括

高度経済成長期には、女性は学校を卒業したらすぐに結婚するのが当たり前だといわれ、社会に出させない政策として専業主婦が期待される人間像として奨励された時代があった。実際に働いてみれば、その大変さから多くの苦勞や失望もあったかもしれないが、働くということとはそれ以上に大きな自己充足感や達成感をもたらすものだといえる。最近の若年層の専業主婦願望は、メディアから伝えられる専業主婦の華やかな部分ばかりがクローズアップされ、専業主婦の持つ心理的フラストレーションについては言及されずに、いかにも専業主婦の生活は楽であるかといったような取り上げられ方に影響されているのではないかと感じる。

現代女性のライフサイクルは、平均寿命の延長とともに多様化し

ている。晩婚化が進み、離婚も当たり前といわれる社会においては、もはや「結婚は永久就職」とは呼べなくなっている。誰もがみな主婦にならない世の中で、主婦から主婦ではなくなる人も増えている。社会の変化に弱いのは、いつの時代も子どもや女性といった庇護されるべき存在の人たちといわれる。しかし、変化の波が急激な現代では、女性が自ら自分の位置を確認していかなければならない。そしていつでも社会の変化に対応していけるよう、自己のスイッチを常に素早く切り替えられるような状態にしておくことが必要である。そうすれば、絶えず変動する社会においても、柔軟性をもって自身のライフサイクルを生き抜くことができるだろう。

【註】

(1) 「日本のインターネット人口は二〇〇五年二月調査時点で七〇〇七万二千人になった。昨年(二〇〇四年)二月調査の六五五万九千人と比較して四四七万八千人増(＋一〇六・八%)と伸びは鈍化しており、二〇〇五年十二月末では七三三万二人となる見通し。インターネット世帯浸透率(利用場所、接続機器を問わずインターネット利用者がいる世帯の比率)は八二・八%となり、昨年の七八・一%から四・七ポイント増加している。また、インターネット世帯普及率(勤務先／学校のみ)「携帯電話／PHSのみ」を除き、自宅の機器でのインターネット利用者がいる世帯の比率)は五五・四%となった」財団法人インターネット協会ホームページより抜粋。

(2) 「ブログ(ウェブログ、Blog、Weblog)とは狭義にはWorld Wide Web(Web)上のウェブページのURLとともに覚え書きや論評などを加え記録(Log)しているWebサイトを指す。

(3) Small Office/Home Office (スモールオフィス・ホームオフィス)、略してSOHO(ソーホー)とは、「パソコンなどの情報通信機器を利用して、小さなオフィスや自宅などでビジネスを行っている事業者」といった意味で使われる場合が多い。しかし、SOHOという言葉の定義は正式に確立されておらず、官公庁や各種団体によりさまざまな定義づけがされている。また、テレワーク、在宅勤務、マイクロビジネスなどと同義語で使われる場合もある(フリー百科事典『ウィキペディア』(Wikipedia))¹⁾

「現代『主婦』の実態とその行方」に対するコメント

矢木 公子

二〇〇六年九月に人文科学研究科女性学専攻課程を修了した来住かおりさん（二〇〇四年後期入学生）の修士論文「現代『主婦』の実態とその行方——『専業主婦』の存続可能性を考察する——」が、本稿において紹介する論文である。

論文筆者（来住かおり）が「主婦」、特に「専業主婦」を研究テーマとした動機には、マスコミをはじめとする社会一般に流通する「主婦」像は近代以降一九七〇年代までに確立されたものであり、現代「主婦」の実態と大きくかけ離れたものであるという自分自身の「主婦」体験から出てきた実感と、最近の一部著者が主張する否定に偏りすぎた「主婦」評価への疑問からである。そこから、論文においては現代「主婦」の実態を考察しそれを基にして存在意義を捉え、さらにそこから今後の「主婦」はどのようなものかを考えることを主軸に構成された。

以上のような動機から研究テーマを確定して入学してきた来住さんではあるが、入学後に「アメリカでは『主婦』はもう研究テーマとされない存在」という言を耳にして、テーマ選択に誤りがあるのではないかと悩んだこともあった。確かに日本においても、一九七〇年以前のように一度主

婦の座につくとその後の人生を「専業主婦」として生きるというライフスタイルは少数になり、子育て後に再度就業する「兼業主婦」が「主婦」の過半数を占めるというように、「専業主婦」が座（社会的地位）から人生の一時기에体験する状況へと変化してきている。しかし、一時期とはいえ「専業主婦」になる女性も多く、さらにその後の自分のライフスタイルの形成に「専業主婦」経験を基にする女性も社会的認知を得て活動の幅を広げている状況や時間的に自己裁量幅の大きい「専業主婦」の利点を生かして収入獲得活動をする女性も出てきているという状況がある。来住さんはそのような認識を深めて、何よりも現代「主婦」の実像を明らかにして社会に定着している「主婦」像を一新しようという意欲を取り戻して研究を進めていった。

修士論文構成は、以下の通りである。

序論

第1節「主婦」の定義、第2節現代の「主婦」の実態、第3節

諸外国の「主婦」の現状

第1章 日本の「主婦論争」の歴史

第1節「主婦論争」の歴史——第一次から第五次論争——

第2節「主婦論争のその後——若年女性の意識、第3節 総括

第2章 調査から見る現代主婦の実像

第1節 現代主婦の実像(1)——全国調査(白書)より——

第2節 現代主婦の実像(2)——千葉県調査より——

第3節 現代主婦の実像(3)——インタビュ調査より—— 総括

第3章 新しい「主婦」の実態——主婦のIT化——

第1節「主婦のIT化」の実態、第2節 自宅で収入を得る「専業」主婦

結論「専業主婦」は今後存続可能か

第1節 女性の生き方(ライフサイクル)の多様化、第2節「主婦」

の社会的地位に関する考察、第3節「専業主婦」でいられる条件、

第4節 専業主婦は存続可能か 総括

参考文献

来住さんは考察を通して、次のような結論に達している。すなわち、「家庭に居ながら収入を得る主婦」はSOHO労働者と捉えることが可能となる。そうすると、従来の主婦に無収入という図式はもはや成立しなくなる。そこから新たな「主婦の定義」が必要となる。企業側も商品の購買力を把握するには主婦の捉え方に細分化が必要と認識してきているのと同時に、商品の売れ行きに主婦の口コミ(最近ではインターネット上でのブログでの評判も)の重要性を認識してきていると指摘している。

男女の平等意識は定着してきているが、実際の家事労働分担においては妻が七〇%以上と旧態依然とした状況であり、また家庭の実権は収入の大半を担っている夫が握っているというように、意識と実態の大きなギャップがみられると言う。

社会的地位という面からみると、晩婚化の進行や離婚の増加によつて「主婦」は不安定な存在のなっている。同時に、「専業主婦」でいられる女性と「兼業主婦」女性との間での階層化が進行しつつある。これは、中間層の崩壊・解体から出てきた当然の帰結ともいえるものであり、したがって近代主婦は消滅したと結論づけている。しかし、夫の収入の多寡だけを指標として「主婦」を階層化することは格差社会形成の一因となると警告している。

長寿化と年金制度のあり方などの要因と、有配偶女性のライフスタイルの多様化から、今後は「主婦」という状況は存続するけれども、社会的地位として固定的に捉えるようなものではなくならないという結論に達している。

来住さんの修士論文は、現代日本で「主婦」状況にいる女性を統計的にまたインタビュ調査により意識と実態を把握し、ITの普及が彼女たちのライフスタイル選択にどのような影響を及ぼし、また、彼女たちの意識と行動が企業活動にどのような影響を及ぼしているかを明確に追究したところが大きく評価できるのである。